後継者がみたマドックス

Philip Campbell

1980年の初頭に飛び込んできた「ジョン・マドックスが*Nature*の編集長として戻ってくる」という知らせは私たちを驚かせた。

その意外性をわかっていただくためには、マドックスを否定するように聞こえる事実を皆さんのお耳に入れる必要がある。人によっては、「そんなことは追悼文に書くべきではない」と思われるかもしれない。けれどもマドックスは、ジャーナリズムとは、そして編集長としての自分の使命とは、何をおいても真実を明らかにすることであると考えていた。たとえそれがどんなに厄介なものであったとしても。

その頃、*Nature*の編集長を7年間務めていたダイことディビッド・デイビスは、活動の場を移すことを決意していた。当時、物理系の編集アシスタントだった私は、同僚たちと同様、誰が後任の編集長になるのか心配していた。選考手続きの一環として、私たちは編集長候補者のリストを見せられたが、そこにピンとくるような名前はなかった。次に起きたことから判断すると、マクミラン出版社の当時の社長であったニコラス・バイアム・ショー（私の前の追悼文を書いた人物）も、このリストの候補者にはあまり興味がなかったようである。

マドックスは、ディビッド・デイビスの前任の *Nature* 編集長だった。彼は、1973 年までの 7 年にわたり絶大な力をもって *Nature* を支配していたため、その退任の背景には穏やかならぬ事情があったと噂されていた。実際、私が 1979 年に *Nature* に移ってきた当初は、同誌の主要な課題の 1 つはマドックス色を排し、彼の過大な関与（と当時はいわれていた）のせいで立った「*Nature* の意思決定は気まぐれで、科学論文の掲載も遅い」という悪評を払拭することであると教えられていた。

これで、その後わずか 1 年あまりでバイアム・ショーが編集長候補者リストも選考手続きも一蹴し、ジョン・マドックスを新編集長に据えろと告げたときに私が感じた驚きと上級スタッフの驚愕（少なくとも 1 人は、これを理由に退職した）は、容易に想像していただけるはずである。当時のディビッド・デイビスの心中をあれこれ推測すべきではないだろう。ただ、彼が良識とプロ意識をもって引き継ぎを行ったことは確信している。

こうしてマドックスは *Nature* の編集長に返り咲き、前回と同じ影響を及ぼした。つまり、*Nature* を成功に導いたのである。

私が *Nature* の物理系の編集者として仕事をしていた時代を思い出すと（私は 1988 年に *Physics World* を創刊するために *Nature* 編集部を去っている）、マドックスは科学論文の選択にはあまり関与していなかった。とはいえ、彼自身が引退時に回想しているように（*Nature* 378,521-523;1995 を参照されたい）、1966 年に最初に *Nature* の編集長に就任したときに、それまで口コミに基づいて行われていた論文評価に査読のシステムを導入したのは彼だった。デイビスの時代を経てマドックスが 2 度目に編集長に着任した頃には、この過程における編集長の役割は小さくなっており、その分、各分野の研究コミュニティに近い専門編集者が大きな役割を果たすようになっていた。この点は今日も同じである。

マドックスは、*Nature* に査読プロセスを導入した張本人であるにもかかわらず、査読のせいで本誌が保守主義に陥ることを常に心配していた。この心配は、「DNA の構造についてのワトソンとクリックの論文は今日の査読システムでは、要件を満たさなかっただろう」という彼の発言に最もよく表れている。この論文は、ワトソンとクリックが所属していた研究室の上司であるローレンス・ブラッグとジョン・ランドールからの推薦を受けて掲載されたのである（いうまでもないことだが、著者の研究室の上司の推薦を受けて *Nature* が論文掲載を決定するなどという情けない話は、今日では笑い話である）。

しかし、マドックスの助手として欠くことのできない役割を果たしてきた、尊敬すべきメアリー・シーハンは、彼の仕事の流儀をよく知っていた。*Nature* のスタッフに掲載を却下された論文の著者がこの決定を覆すようマドックスに訴えてきた場合など、マドックスが直にタッチすることになると、わずかに数本の論文の処理に限りなく時間がかかった。私は実際、彼の車の後部座席から、まだ返事を書いていない訴えの手紙の山が見つかったと聞いても少しも意外に思わないだろう。その一方で、彼はときどき本当に重要な論文を見つけて歓喜し、記録破りのスピードでその処理と掲載ができるよう手配することもあった。

マドックスは、2 度目の任期では投稿されてきた論文の評価を人に任せられるようになっていたものの、査読者の場合と同様、*Nature* のスタッフが保守的になりすぎ、（特に生物学の注目領域で）高いインパクトファクターを獲得しようとするあまり、大胆なアイデアが認められなくなることを心配していた。私は、新しい偉大なアイデアを見落とすのではないかという不安をもたない編集者などどこにもいないと思う。私たちは皆、さまざまな方法でこの問題に取り組んでいるので、読者諸氏には安心して論文を投稿していただきたい。マドックスは時に、査読にまわしても論文の発表が遅れるだけだと確信したときには、査読のシステムを無視したり、完全に放棄したりした。彼にはその意欲だけでなく、権限もあったからである。マドックスは、査読システムを無視してフレッド・ホイルらの宇宙論の論文を掲載した（彼は、ホイルのような型破りの科学者を最も尊敬していた）。また、リチャード・リーキーがオルドバイ渓谷で発見して論争を引き起こした最古のヒト科動物の化石についての論文は、査読システムを完全に放棄して掲載された。

けれども、マドックスが *Nature* の編集長として君臨した 2 回の任期の中で最も大きな影響を及ぼしたのは、ジャーナリストとしての側面だった。彼の 2 度目の任期である 1980 年代から 1990 年代にかけて全世界での発行部数が大幅に増加したのは、綿密なマーケティングだけでなく、彼のジャーナリスティックな本能にも従ったことが吉と出たからである。本能に従ってすることは「仕事」ではなく「遊び」である。*Nature* のどの編集長（そして多くの同僚）もそうだが、マドックスはあきれるほどよく仕事をした。けれども彼は、競争の激しい業界を生き残るためには、何よりもまず仕事を楽しまなければならないということをよく知っていた。騒動を引き起こしそうな行動に出ようとするとき、彼はいつも「そのほうが楽しいからだ」といつていた。いかにもマドックスらしいこの言葉が出るとき、同僚はいつも痛快さと不吉な予感がせめぎ合う、何ともいえない気持ちになった。

編集者としてのキャリアを通じて、彼は膨大な量の文章を執筆し、科学への興味はとどまることを知らなかった。恐ろしく記憶力がよかった彼は、普通の人なら正確さを期するために資料にあたるところまで記憶に頼って書くことが多かったので、少なくとも後年の著作には事実関係の間違いが散見され、そのことが玉にきずとなっている。けれども私やほかの多くの読者にとって、そのような間違いのために、彼がいわんとすることの刺激的な質の高さが損なわれることはめったになかった。

マドックスは多くの論争を引き起こし、そのいくつかは強い印象を残した。彼は、環境問題における「政治的正しさ」を嫌悪していた。また、科学的直観から、地球環境の変化の危険性が誇張されすぎていると感じていた。この2つの感情からマドックスが仕掛けた論争に彼自身は夢中になっていたが、世間にはほとんど影響を及ぼすことができなかった。彼は、『Doomsday Syndrome (邦題：人類に明日はあるかー反終末論)』(McGraw-Hill 刊, 1972) という著書でレイチェル・カーソンの『Silent Spring (邦題：沈黙の春)』を攻撃しているが、その核心には危険が誇張されすぎているという科学的直観があった。彼はその後も、カール・セーガンらが擁護した「核の冬」のシナリオや、気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の統一見解にも反対したが、これには科学的直観だけでなく感情的なものも混ざっていた (と私は思う)。

ほかのいくつかの論争は、私がみるかぎり、より興味深いものであり、編集者仲間も関心を寄せていた。マドックスは、HIV は AIDS の原因ではないとする Peter Duesburg の主張、「低温核融合」、水が「記憶」をもつというジャック・バンヴェニストの主張を真っ向から攻撃した。彼は常々、自分が重大な関与をしたこの3つの悪名高い論争についての本を書きたいと願っていた。その願いが叶わなかったことを、私は極めて遺憾に思う。マドックスがこれらの論争を楽しんでいたことは明らかだが、私は彼がこのような動きに出た理由は、いたずらにセンセーションをねらったからではなく、知的に糾弾する義務があると感じたからだと確信している。彼は本当に、HIV と AIDS との関連に疑いを投げかける人々が科学的に悪質であると考え、その信念に従って運動を展開したのである。彼はまた、低温核融合の主張とそれに対する反証が科学的に健全な方法で行われることを希望したからこそ、当初の主張の1つを却下し、実験による反証の1つを掲載した自分の判断が十分な根拠に基づいていることを明らかにするという手順を踏んだのだ。

バンヴェニストの論文をめぐるエピソードは、権威ある研究室から科学的に不合理な結果を報告する論文が投稿さ

引退し、ナイト爵に叙された頃のマドックス (1996年)。

1969年のNature創刊100周年記念号(上)と1994年の125周年記念号の表紙(下)。どちらも編集長はマドックスだった。

れ、査読者が明らかな不備を指摘することができない場合の編集長の対応についての極端な一例として、科学出版の記録に残る出来事である。マドックスは、論文を掲載してから奇術師ジェームズ・ランディを含む調査チームを研究室に送り込んだ。バンヴェニストは彼らの前で同じ実験を行ったが、論文の結果を再現することはできなかった。事のしだいは、フィリップ・ボールの著書『H₂O: A Biology of Water (邦題：H₂O—水の伝記)』(Phoenix 刊, 2000)で詳しく述べられている(フィリップは、この論争が起きたときにNatureで仕事をしていた)。私はときどき、「あなたが当時の編集長だったら、同じようなことをしましたか？」と尋ねられる。後知恵ならいくらでもいえるが、私なら、掲載の後ではなく前に奇術師に来てもらっただろう。

マドックスは、あらゆる分野の有力者と知り合いだった。もちろん、英国の名士の知り合いも少なくなかった。彼は非凡なネットワーカーであり、少なくとも閣僚、できれば首相と知り合いになることが自分の仕事だと思っていた。けれども、英国の名士と同席しているときの彼は、いつも警戒しているようにみえた。こうした人々とくつろいで会えるようになったのは、彼が引退してからのことだった。これはおそら

く妥当な判断だった。彼が辛辣な論説を書くたびに、どこかの有力者を敵に回していたからである。1980年代の中頃には、マドックスのこうした立場を象徴的に物語る出来事が起きた。彼はそのとき英国医療審議会の会合に招待されて出席していたのだが、早々に退席してしまった。彼自身の言葉によると、英国医療審議会が自分を会合に招待したのは、この団体とその会長であるジェームズ・ゴワンスを公的に批判していたことについて、申し開きをさせる魂胆があったからだ気づいたからであるという。

このような姿勢にもかかわらず、あるいはこのような姿勢ゆえに、そしてもちろん科学ジャーナリストおよび編集者としての業績をたたえて、マドックスは引退後すぐに王立協会から特別に新設された名誉職を受けたほか、ナイト爵にも叙された。

論争によりマドックスは多くの敵を作ったが、彼を慕う人も多かった。こうした人々は彼のことを、ほかの人々が価値を認めてくれなかった頃から自分の研究を擁護してくれた編集長として好意的に記憶している。とはいえ、マドックスが編集長として自由に行動することができたのは、ニコラス・バイアム・ショーと、当時の *Nature* の所有者であったマクミラン一族の支えがあったからである。彼らは、マドックスについて寄せられる苦情をそのまま彼に伝えていた。

マドックスは、特定の研究だけでなく地域のためにも戦った。彼は一連の地域特集を開始し、歴史的、地理的、政治的、科学的にその土地に切り込んでいき、彼一流の文体で20～30ページにわたってさまざまな角度から考察を繰り広げた。

傲慢？ ジャーナリストの不遜？ そうかもしれない。けれども *Nature* が組む一連の地域特集は、特に、逆境の中で粘り強く研究を続けるインドやロシアの科学者の姿がマドックスに感銘を与えたときには、大きな実を結んだ。もっとも、こうした特集には犠牲も付いてまわった。私の同僚である製作編集者のチャールズ・ウェンツは、「なにしろ、特集で何を主張すべきかがみえてくると、マドックスの頭の中では完成したことになってしまうのだから」と回想する。そのため、彼の頭の中にある文章を実際にしたための作業は後回しにされた。多くの場合、締め切りの期日を過ぎてから。

ニーチェは、偉大な人間は「より冷淡で、より冷酷で、より一本気で、『世論』をなんら怖れることがない」といった。マドックスが偉大な人間であつたにしろなかつたにしろ、私にはこの言葉が彼のことをよくいい当てているように思われる。ニーチェはまた、偉大な人間は「仮面を付けて」いて、「彼の心の内には、とうていほめたり咎めたりすることのできない孤独」が潜んでいるともいっている。マドックスは人付き合いを楽しむことができ、必要とあれば、ポーカフェイス

で交渉にあたることもできた。彼は仲間を大切にしたが、本質的な部分で個人的な事情に左右されることはなかった。彼には人をみる目があり、しばしば人々の支えとなり、（私が知るかぎり）ほかのスタッフの利益を裏切ることとは一度もなかった。プロとしての彼は、時として無情な決断をし、常に冷静沉着で公平だった。こうした特質とジャーナリスティックな名人芸を併せもつマドックスは、何かと物議の種にはなったが、やはり偉大な編集長だった。

私はこの追悼文を執筆するにあたり、できるだけ客観的な事実のみを語るように心がけた。マドックスは多くの優秀な人材を登用した。なかにはまだ *Nature* で仕事をしているスタッフもいて、彼について好意的な想い出をもっている。マドックスはまた、一部の優秀な人材を解雇した。そうした人々は、彼について私よりも批判的な見方をするかもしれない。私はここで彼を評価しようとはしなかった。評価をするべきだったかもしれないが、私にはそれができなかった。上述の「個人的な事情に左右されない」という意味で、私は彼のジャーナリスティックなアプローチに影響されているからである。彼は、指導することではなく模範を示すことにより、私たちがなすべきことを教えてくれた。彼はまた、私たちの判断力を尊重してくれていた。彼が *Nature* を去ってから、出版物にも *Nature* 編集部にも、さまざまな点で大きな変化が起きた。その変化がよいものであるか悪いものであるかは、私が判断すべきことではない。けれども、彼が確立した基準と手順の多くは、今日もまだ大切に守られている。

1980年にジョン・マドックスが *Nature* の編集長に返り咲くという知らせを聞いたとき、私は彼についてほとんど何も知らなかった。私は彼を、ラジオの科学番組（私も知人の若い研究者たちも、彼の番組を熱心に聴いていた）と、当時の *Nature* 編集部で彼の名が口にのぼるときの奇妙な雰囲気を通してしか知らなかった。そこで私は、ジョンについてディビッド・デイビスと話をした。もちろん、ディビッドの微妙な立場は十分理解していたが、彼の公平さもよく知っていたので、ジョンのことを教えてもらいたかったのだ。ディビッドはジョンの親しい知人ではなかったし、立場上、慎重にならざるをえないところもあったのだろう。私は、彼から多くを聞き出すことはできなかった。けれども彼は1つのことを教えてくれた。その言葉は、当時は何でもないことのように思われたが、私はやがて、ジョンの本質を見事にいい当てていることを実感した。 *Nature* に掲載する碑銘として、これほどふさわしいものはない。「ジョンは科学を愛した」。

Philip Campbell (フィリップ・キャンベル) は、1995年にジョン・マドックスの後任として *Nature* の編集長に就任し、今日に至る。